

説教 『聖霊と幻』山本 護 牧師

聖書 創世記 32:23~29 / 使徒言行録 16:6~10

バルナバは「立派な人物で、聖霊と信仰に満ちていた(使徒 11:24)」。彼はパウロの信仰を導いた恩人であり(9:26~28, 11:25~26)、エルサレムの使徒や長老らに「異邦人の救い」を認めさせた働き人であった(15:12~19)。彼ら二人は使徒によって、異邦人伝道へ派遣されることになったが(15:25)、鷹揚で甘いバルナバと、信念ゆえに頑ななパウロは激しく衝突して、行く道が分かたがれた(15:39~41)。

パウロは「恵みのみ」の原則には神経質で、指導的な立場の者が古い慣習を気遣ったりすると爆発した(ガラテヤ 2:12~13)。かといって凝り固まった原理主義でもなく、状況に応じた対処もした。「ユダヤ人に対してユダヤ人のように、律法に支配されている人にはそのように、律法を持たない人にはそのように、弱い人にはそのように(1コリント 9:20~22)」する柔らかさはあった。バルナバとの訣別で自らを省み、「信仰の原則」と「己が義」を分けて考える硬柔を身につけたのか。その硬柔が後の可能性を開いた。「パウロは、このテモテと一緒に連れて行きたかったので、その地方に住むユダヤ人の手前、彼に割礼を授けた。父親がギリシア人であることを、皆が知っていたからである(使徒 16:3)」。

シラスを供なした伝道旅行の途上、パウロは「アジア州で御言葉を語ることを聖霊から禁じられた(16:6)」。また「ビティニア州に入ろうとしたが、イエスの霊がそれを許さなかった(16:7)」。神による救いの告知が、聖霊とキリスト自身によって阻まれる。これはどういうことであろうか。「キリストの名のために身を献げ(15:26)」、恩あるバルナバと訣別してまで貫いた命がけの信仰が阻止されるとは。

「こうして、教会は信仰を強められ、日ごとに人数が増えていった(16:5)」。伝道の成果は上昇基調。状況は信徒数を増やす好機に違いないのだが、そうした小賢しい見通しは阻止される。パウロらは意気消沈したのだろうか。そりゃ、がっくりしただろう。聖書は心情を語らず、出来事だけを淡々と報告する。彼らは思い直し、聖霊に阻まれたならば迂回しようと歩み出す(16:8)。するとその晩、パウロは幻を見る(16:9)。そして幻に導かれてマケドニアへ向かった(使徒 16:10)。パウロは、人間的な見通しではなく、幻によって「神がわたしたちを召されているのだと、確信にするに至った(16:10)」。

私たち八ヶ岳伝道所の歩みもスムーズではなかった。開拓伝道を始めてすぐに教団加盟申請したが否決され、それを要求し続けた約十年はほとんど無視された。その折々に憤り、迂回も考えたが(16:8)、見渡せばここに数名が礼拝する「キリストの体(マタイ 18:20)」は出来ていた。教会手続きの世俗性にうんざりする一方で、私は幾人かの信徒と共にキリストの「幻」を見ていた。今ふり返ってみると、八ヶ岳伝道所の場合は「聖霊に禁じられた(16:6)」というより、「聖霊に整えられた」のだと思える。

ヤコブは神と闘って勝った(創世 32:29)。腿の関節を外されたヤコブ(32:26)は負けも同然だが、去ろうとする神にヤコブは、「祝福してくださるまで離しません(32:27)」と粘りに粘って「祝福」を獲得する(32:30)。神は不動で、人間はただそれに従うだけではない。率直な志は神をも動かす。すなわち「幻」とは、受け身で「見せてもらう」ものではなく、私たちが祈りの内に「見る」ものなのだ。



【おまけのひとつ】

理性や願望では捉まえない幻 理性や願望は 私の内側に反響する世俗の変形なのだから
聖霊は神とキリストと一体でありつつ 幻として現れる 幻たる聖霊は どこか私の一部なのか